

論文要旨

疑問文を作るパターンプラクティスが即興的なやり取りに与える影響

1. はじめに

筆者は日本の公立中学校で 22 年間、英語の授業を行ってきた。特に、話す活動を重視してきた。教科書本文についての生徒とのインタラクション、教科書本文を活用したスキット、発信力を高める様々な音読活動、新出文法事項を使ったインタビュー活動、スピーチコンテストなどに取り組んできた。

その中で、生徒が「即興的にやり取り」をすることに課題があると、日々の授業の中で実感をしてきた。実際に、文部科学省が行っている「全国学力・学習状況調査」の結果からの成果・課題として、「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分ではないということが挙げられている（本多 2018:10）。

また、平成 29 年 3 月改定の学習指導要領では、話すことについては「やり取り」と「発表」の 2 つの領域に分かれることになり（本多 2018:40）、ますます、効果的な指導法が必要となってくる。

「即興的なやり取り」として、本多は「1 分間チャット」が効果的であると述べている（本多 2009,2018）。そして、「1 分間チャット」が行えるようになるには、その前に、帯活動としてある一定期間、ペアで一方が英語の質問をし、もう一方が英語で答え、さらに 1 文付け加える練習を行い、その後、また一定期間、ペアで特定の話題について会話をする練習をする必要があると述べている（本多 2018:110）。さらに、本多は相手の述べた内容に関連することを質問する練習も行ったと述べている（本多 2020:85）。

しかし、以上の実践は帯活動として、教科書を使用する普段の授業との内容との直接的なつながりが少ない。そこで、普段扱う教科書でも関連する活動を行うことで、「即興的なやり取り」を生徒が行う力はさらに促進されるのではと考えた。

例えば、山家保先生記念論集刊行委員会(2005)は「自由な会話」がどのようにすれば最も能率的・効果的に進め得るかについては、効果的な指導理論も指導技術も開発されてはいないので、その前段階である「管理された会話」を行うことが必要であると主張している（山家保先生記念論集刊行委員会 2005:118-119）。「管理された会話」とは、教科書本文の内容が応答文になるように、生徒に疑問文を発話させ、その疑問文に相当する応答文を言わせる活動である。

そして、山家保先生記念論集刊行委員会(2005)はこの「管理された会話」を行うためには、平叙文から疑問文を作る「転換」の作業を事前に行うことで、教科書本文には出てこないけれども、教材の内容についての問答で必要な疑問文を自ら作り出せるようになると主張している（山家保先生記念論集刊行委員会 2005:101-103）。

以上のことから、「即興的なやり取り」である「1 分間チャット」を効果的に行うためには、教科書本文から疑問文を作る「転換」の作業、そして「管理

された会話」を継続的に行うことが有用だと考え、本研究を進めていきたい。

2. 先行研究

本多(2018)は、平成 29 年 3 月改定の学習指導要領では、互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動が重視されており、そのような言語活動の中の 1 つである、「即興的なやり取り」としての「1 分間チャット」が行えるということは、生徒同士が、英語を用いて、原稿を用意することなく、ある話題について、間違いを恐れずに会話を続けるということである。第二言語の発達は多面的なので複雑性・正確性・流暢性の 3 つの指標で捉えるべきであり(Housen, Kuiken & Veddar 2012:1)、このような活動が可能になるために必要になることは、特に流暢性を高めることだと考えることができる。しかし、流暢性を高めた結果、発話の内容が不正確になって正確性が低下する、発話される表現が単調なものとなって複雑性が低下するといった、「トレード・オフ」(Skehan 1998:108)が起こる可能性があるため、3 つの指標がバランスよく向上する指導が求められる。

海外の研究では、Segalowitz(2010)、Kormos(2006)、Ranta と Lyster(2007)、DeKeyser(2007)、Skehan(1998)などが反復練習の結果、第二言語知識の自動化がなされ、流暢性の向上に貢献すると述べている。日本では佐藤ほか(2022)が同様の主張を行っている。

日本でよく実践されている、第二言語知識を自動化するために大量の反復を伴う練習として、教科書本文の音読指導が当てはまると Suzuki(2023:11)は述べており、具体的な実践例としては村野井(2006)、本多(2011)、北原(2010)、鈴木と門田(2012:13)、若本ほか(2017:147)、正頭(2015:13)、伊東(2008)、斎藤(2011)が挙げられ、いずれの実践例も明示的に述べられているわけではないが、第二言語知識を自動化するために反復を伴う練習を行っているため、同列のものであると考えることができる。

即興的なやり取りにつながる、言語知識の自動化としては、疑問文を練習するパターン・プラクティスが考えられ、若本ほか(2017)、山家保先生記念論集刊行委員会(2005)が支持している。この主張を裏付けるものとして、Thornbury と Slade(2006)は、会話は質問と応答のやり取りで成り立っていると述べているため、疑問文と応答文を練習することは有用であり、Larsen-Freeman と Anderson(2011)は繰り返しが習慣を強めることを主張し、DeKeyser(2007)は体系的・意図的に第二言語の知識を高めようとする特定の活動を練習と定義づけているため、このような活動は有用であると考えることができる。また、Ortega(2007)の主張する、双方向であること、意味をなすこと、タスクに必須な形式に焦点化していることの 3 つ外国語の教室で設計されるべき練習の原則にも一致すると考えることができる。

質問と応答を練習する活動としては、本多(2009)の「生徒による Q&A」、Wong と Waring(2020)の「ターンの完了の監視」があるが、生徒が自ら発話したい疑問文を発話するわけではない。生徒が発話したい疑問文を自ら発する活

動として、太田(2007)の「DIY Quiz」、松村(2012)の「イエス・ノー・クイズ」、齋藤(2008)の「段階的な質問作成活動」、伊東(2008)の「主体的 Q&A」などがあるが、どれも質問文に慣れる活動としては効果的ではあるが、やり取りを行う活動としては不十分なものである。

このように、「即興的なやり取り」につながるように疑問文を体系的に練習する実践は存在しないため、山家保先生記念論集刊行委員会(2005)の疑問文を作るパターン・プラクティスである「転換」と「管理された会話」は疑問文を体系的に練習することができるため、「即興的なやり取り」につながる可能性は検証される意義があると考えられることができる。

パターン・プラクティスについての研究では、平嶋(2007)、井上(2017)、江口と早瀬(2018)、水川・樫葉(2020)が挙げられるが、大学生を対象にしたものが多く、パターン・プラクティスを誤解していると思われる研究も存在し、疑問文を作る練習まで行っている研究は見当たらない。

第二言語知識の自動化のために練習の重要性に加えて、Kormos (2006)、Skehan(1998)、Wray(2008)、金澤ほか(2020)、伊東(2019)は、定型表現を多く習得することが流暢性につながると主張しており、使用可能な定型表現を増やすことは、英語学習に有用であることが分かるため、パターン・プラクティスを行うことで使用可能な疑問文や応答文を定型表現として多く練習することは、即興的にやり取りをすることに近づくと考えることができる。

やり取りに関して、国や東京都で行われた話すことに関する学力調査でもやり取りの問題は出題をされている。しかし、やり取りの実証的な研究では教師と生徒を対象にしたものが多く、生徒同士のものが少ない。生徒同士のやり取りを対象にした研究からわかることは、やり取りだけ行わせるのではなく、何かしらの介入が必要であるということである。

話す活動を行う機会として、Warm-up と前時の復習の間に来る、一定期間行う帯活動(太田 2012:78)が効果的であり、北原(2010)、本多(2020)も同様な実践をしている。帯活動に限定しなくても、英語でのやり取りを実際に練習させる活動を上山(2018)、瀧沢(2019)、胡子(2018)、江澤(2022)が提案しているが、いずれも英問英答の練習と自由に会話をする活動を提案しているが、英問英答はリストを活用する活動のみで、生徒が自ら疑問文を考え出して発話するような活動は存在しない。

日本国内では、日本人中学生を対象にした現職教員による派遣研修の報告書に、いくつか即興的に話すことをテーマにしたものが見られ、野坂(2019)、相澤(2020)、寺尾(2016)、高原(2019)、阿波連(2020)、新垣(2020)、濱田ほか(2016)、小廣川(2018)が挙げられるが、いずれも実態を把握するものや、アンケートによる分析のみであり、量的な研究はされていない。

また、日本で行われた即興性に関する量的な研究では、山城(2013)が国立の中学校で、教師と生徒のやり取りを分析し、千菊(2019)が国立の高等学校で教師と生徒のやり取りを分析し、山本ほか(2022)は公立の口頭学校で生徒同士のやり取りを分析したものが存在するが、公立の中学校で生徒同士のやり取りを

分析したものは見られない。

これらの先行研究から、本研究において日本語を母語とする中学生を対象に、日本の公立中学校において、英語を対象言語にした生徒同士の双方向の話すことに関する即興的な活動を扱う意義があると考えることができる。

3. 研究課題

日本人の中学生の発話を介入なしで研究したものとして、Ota(2002)、小泉と山内(2003)、Kosuge(2004)、瀧口(2004)、高校生の発話を介入ありで研究したものとして藤森(2004)と千菊(2019)が存在する。これらを参考に分析には複雑さとして、疑問文の数と1文付加した回数、正確さとして、誤りのない文の数、流暢さとして1分間あたりの実発話語数を使用する。

これらに加え、定型表現よりも幅広い内容を話せているか検証する。そのため、発話された疑問文のうち、事前に学習した「生徒同士による Q&A」(本多 2009)に登場した疑問文の割合を、定型表現の指標とし、定型表現の割合が低下するほど、幅広い内容で話せていると見なすこととした。

最後に、相手の発話をもとに、一貫した話題で自然にやり取りを進めることができるかを検証する。そのため、会話の内容を分析し、話題の推移の回数が低下するほど、一貫した話題で自然にやり取りを進めることができていると見なすこととした。

以上を踏まえ、リサーチ・クエスチョンとして以下の 5 つを設定する。

- ① 疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて複雑性を高めるか。
- ② 疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて正確性を高めるか。
- ③ 疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて流暢性を高めるか。
- ④ 疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて定型表現の使用率を下げるか。
- ⑤ 疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて話題の推移の回数を下げるか。

3. 研究方法

研究協力者は、筆者が授業を行った東京都の公立中学校の 6 学級の生徒 231 名である。

帯活動として、2022 年 1 月に「1 分間チャット」(本多 2009)を授業内で実施した。2021 年 9 月に帯活動で実施した「生徒による Q&A」(本多 2009)で練習した 36 の質問文のうち、3 つを選び、それぞれ 3 回ずつ、全部で 9 回実施した。

続いて、「1 分間チャット」Pre-Test を 2022 年 3 月に実施した。通常の授

業の時間の中で、復習問題のワークシートを自主学習しながら、教室の後方に移動し受験した。授業内の帯活動の「1 分間チャット」で出題しなかった、「生徒による Q&A」の疑問文 33 文の中から、帯活動の「1 分間チャット」で出題した疑問文と同じような内容になると予測される 3 問出題した。

このテストでは、各ペアが試験監督である著者が 3 枚のカードからランダムに引いた 1 枚に書いてある疑問文から 1 分間会話をした。テストの内容は全てビデオカメラで録画され、その音声データを元に筆者によって文字起こしがされた。

2022 年 4 月より奇数学級のみ、英語の授業の最後の 5 分間に教科書本文から疑問文を作るパターン・プラクティスを実施した。全 12 回である。

2022 年 6 月 13 日に「1 分間チャット」Post-Test を実施した。Pre-Test と同様の手順で行われ、分析が行われた。

4. 研究結果と考察

本章では Pre-Test と Post-Test における実験結果を紹介する。Pre-Test と Post-Test の両方を受験したのは、実験群が 72 名、統制群が 64 名であったため、これらの生徒のみの結果を活用する。

1 つ目の研究課題は「疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて複雑性を高めるか。」であった。疑問文の数と応答文に 1 文付加した回数に関して、実験群と統制群の間に差は見られなかった。

2 つ目の研究課題は「疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて正確性を高めるか。」であった。Pre-Test の前に生徒は生徒同士による Q&A で疑問文と応答文の言語形式を意識した練習を複数回行い、その後、1 分間チャットで言語内容を意識した練習を複数回行った。この時点では生徒の意識は言語形式から離れている。しかし、実験群だけは疑問文を作るパターン・プラクティスを行うことで、もう一度言語形式を意識した練習を複数回行った。言語内容に焦点を当てた活動の後に、言語形式に焦点を当てた活動を行ったので、focus on form(Ellis at al. 2019)に似た効果が表れたと考えることができる。

3 つ目の研究課題は「疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて流暢性を高めるか。」であった。「即興的なやり取り」は疑問文とその応答文、そして応答に関連する文が付加される、もしくは付加されずに次の疑問文が発話されることが繰り返す。つまり、疑問文と応答文を多く発話することになる。疑問文を作るパターン・プラクティスを複数回に渡り実施することで、疑問文と応答文を、モデルの復唱だけではなく、生徒が自分で考えて疑問文を発話し、そして対応する応答文を発話するという練習を反復するため、知識の自動化(DeKeyser 2020)につながり、流暢性の向上に貢献するという、Segalowitz(2010)の主張と一致すると考えることができる。

また、3 つの指標をまとめて分析すると、統制群では「即興的なやり取り」を行う際に、複雑性に注目した結果、トレード・オフが起こり、正確性と流暢

性が下がってしまったが、実験群は **Pre-Test** の後に複数回、疑問文を作るパターン・プラクティスを実施した結果、トレード・オフが起こらず、流暢性、複雑性、正確性の全てが向上することができたと考えることができる。

4 つ目の研究課題は「疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて既習の定型表現の使用率を下げるか。」であった。実験群は疑問文を作るパターン・プラクティスを複数回行うことで、様々な形式の疑問文を発話する練習を行い、疑問文の第二言語知識を自動化(DeKeyser 2020)することで、**Post-Test** の中でも同様に発話することができる疑問文の種類が増えた。その結果、**Pre-Test** では、疑問文を発する能力が低かったため、既習の定型表現に頼っていたが、実験群では、**Post-Test** で生徒自身が発話したい疑問文を発話する割合が増えたと考えることができる。

5 つ目の研究課題は「疑問文を作るパターン・プラクティスは、即興的なやり取りにおいて話題の推移の回数を下げるか。」であった。実験群は疑問文を作るパターン・プラクティスを複数回行うことで、様々な形式の疑問文を発話する練習を行い、疑問文の言語知識を自動化(DeKeyser 2020)することで、**Post-Test** の中では発話の形式よりも発話の内容に焦点を当てることができ、相手が発話する内容にも焦点を当てて適切に応答することができたため、一貫性のある発話ができるようになり、「積極的聴取者」(Salaberry と Kunitz 2019:231)として、話題を不自然に推移させる必要がなかったためと考えることができる。

5. 結論と今後の課題

本研究では日本の公立中学校の英語授業において、生徒が「即興的なやり取り」である「1 分間チャット」において、複雑性、正確性、流暢性を高めるためにまた定型表現よりも幅広い内容で発話し、一貫した話題で会話をするのに必要な練習として、疑問文を作るパターン・プラクティスがどのように影響するか、研究を行った。疑問文を作るパターン・プラクティスを帯活動として 12 回行った実験群の方が、行わなかった統制群と比べて、正確性の指標である正確な文の割合、流暢性の指標である語数が向上し、定型表現の使用率と話題の推移の回数が低下した。一方、複雑性に関しては差が見られなかった。

以上の結果より、肯定文から疑問文を作って発話し、それに対応する応答文を発話する練習の反復を通して、これらの言語知識が自動化(DeKeyser 2020)され、Segalowitz(2010)が主張するように、自動化された知識が流暢性に貢献し、正確性にもよい影響を与えることがわかった。しかし、複雑性に関しては影響が見られなかった。

また、統制群は複雑性のみ高まっている。一方、実験群は流暢性、複雑性、正確性の全ての指標が上がっているのは、疑問文を作るパターン・プラクティスを複数回行うことで、トレード・オフ(Skehan 1998)が起きなかったからと考えることができる。

今後の課題として、以下の 3 点が挙げられる。

本研究では、教科書本文から疑問文を作るパターン・プラクティスを行ったが、実際に「1分間チャット」で発話することが想定される疑問文を練習しているわけではない。実際に生徒が発話することが想定される疑問文を練習するような工夫をすることで、生徒は「1分間チャット」の中でより自由に発話することができるようになると思うことができる。

また、本研究では帯活動として疑問文を作るパターン・プラクティスを行ったが、山家保先生記念論集刊行委員会(2005)によれば、本来は教科書本文の復習の活動の一環として行われるべきである。現代の英語授業の指導手順にそのまま加えることは難しいが、工夫をすることで組み込み、より効率的に実施することが望まれる。

さらに、本研究では生徒が疑問文を作るパターン・プラクティスや1分間チャットについて、難易度や有用性を調査する質問紙を実施していない。今後の研究では、生徒の実情を分析できる工夫が期待される。